

近世・近代の史料にみる近江商人の旅

桂 浩子

はじめに

関東や信州、蝦夷地など遠隔地に支店を構えた近江商人は、奉公人が数年間隔でおこなう在所登りをはじめ、当主の店廻りなど、近江の本宅と支店間をたびたび行き来していた。

こうした旅は近江商人を構成する要素のひとつであり、旅の記録を用いて日野の中井源左衛門家当主がおこなった得意廻りや、近江八幡の谷口兵左衛門家の奉公人の在所登りにかかる費用などがこれまで明らかにされてきた。⁽²⁾

本稿では滋賀県近江八幡の西川伝右衛門家、市田清兵衛家、谷口兵左衛門家、彦根柳川の柴谷家の商家文書から近江商人の旅の一端を明らかにするものである。

第一章 本宅―支店間の行程

第一節 商家と旅の記録

本稿でとりあげた商家は蝦夷地へ渡り商いをおこなった柳川商人の柴谷家や同地で場所請負をつとめた八幡商人の西川伝右衛門家、上州高崎に店を構えた市田清兵衛家、奥州仙台に支店を置いた谷口兵左衛門家の四家である。⁽³⁾

① 柴谷家

近江国愛知郡柳川村（現彦根市柳川町）出身で、寛永期に松前へ渡り文化頃には江差へ移転。木屋文右衛門として呉服太物や日用品を商うほか、蝦夷地の産物を京都や大阪へ販売していた。

出身地である柳川村は田附新助影豊や建部七郎右衛門を嫡矢に蝦夷地への進出者を輩出しており、隣接する薩摩村の商人らと松前において「小中組」と称し、資金の融通や共同経営をおこなっていた。また同地に進出した八幡商人をくわえた「両浜組」は、松前藩の貸付金や御用金を負担するかわりに特典を与えられた組織で、柴谷家は寛永から明治に至るまでその中堅に位置していた。⁽⁴⁾

柴谷家の旅記録としては天保七年（一八三六）「文次郎初登小遣帳」⁽⁵⁾があり、天保七年九月七日に松前を立、翌月一七日に帰国した柴谷文次郎の初登り記録で、宿賃や飲食代など道中の出費が記されている。このほか「北陸道中記」⁽⁶⁾は、大津から松前に至るまで、日本海沿岸に沿った北陸街道の各宿場について名前や距離、特徴を次のように記している。

〈史料1〉

上

一鰯ヶ澤江 四八 三里

此間海辺七里ノ間人家ナシ

十三濱ト云ハ是ナリ中飯モ濱中ニテ喰水モ自由ナラス

下

一十三江 四八 七里

川アリ大ワタシ

此間馬次井サ町脇本二ヶ所有登リハ小泊ヨリ味ヶ沢へ アイタイ
頼ヨシ本道ハ岡道々遠馬次數多アリ道ハヨシ濱辺ヨシ

これは津軽半島に位置する鰺ヶ沢村（現青森県西津軽郡鰺ヶ沢町）と十三村（現青森県北津軽郡市浦村）についての記述で、鰺ヶ沢―十三間の海辺（七里長浜）には人家がなく飲食が不自由すること、つづく十三村では馬継について記している。また日本海沿いの街道には川が多かったようで、「出口ニ大川アリ舟ワタシ此間六ヶシキ川多シ歩行人ハ馬タノムヘシ」など注意を促す記述もたびたびみられた。同様の史料として明治十一年（一八七八）「東海道行程并渡海写」⁽⁸⁾があり、奥州街道や東海道など諸街道の宿場について記されている。奥州松島では「寫々絶景筆端ニ不及シホガマヘ舟ニテ行岡道モ有レト舟路ノ景色尤ヨシ」とし、東海道府中宿でも「此所ニ富士浅間社有阿倍川歩渡シ名物ノ餅アリ五文取ト云價程ノ美味ナシ」とするなど、「北陸道中記」にくらべ所感が多いのが特徴である⁽⁹⁾。

さらに柴谷文書には「三都講定宿判取帳」⁽¹⁰⁾や、「千島講人馬駄賃帳」⁽¹¹⁾など近世に興った講に関する史料ものこされている。「三都講」⁽¹²⁾は天保元年（一八三〇）に大阪の河内屋庄右衛門を講元とした旅館同盟で、「三都講定宿判取帳」には江戸日本橋から伊勢まで各宿場で講に加入した旅館がまとめられている。「千島講」⁽¹³⁾は敦賀の廻船問屋仲間が蝦夷・松前・江差の廻船問屋仲間を講元に含めて興した団体で、「千島講人馬駄賃帳」には津軽半島の小泊から十三、鰺ヶ沢、深浦までの駄賃が記されている。

②西川伝右衛門家

柴谷家と同じく蝦夷地に進出した商家で、初代伝右衛門昌隆が慶安三年（一六五〇）に松前へ渡り、福山小松前町に住吉屋伝右衛門として店を開いた。同地で呉服太物を商い、後年は忍路・高島などで場所請負をおこなうほか、肥料販売会社や缶詰工場の設立など様々な事業も営んだ。松前に進出した近江商人が組織した「両浜組」には岡田彌三右衛門など他の八幡商人とともに名を連ねている。

西川伝右衛門家文書には九代伝右衛門昌武（天保四年～文久二年）や一〇代西川貞二郎（安政五年～大正一三年）の旅記録がのこされている。九代伝右衛門の安政六年（一八五九）の松前下りの記録「松前下り御旦那様友治郎駒吉五兵衛荷持善兵衛都合五人道中諸式入用扣」⁽¹⁴⁾は八幡を出立し敦賀あたりで記録が途切れているが、同年一〇月の八幡登りの記録「道中諸入用覚帳」⁽¹⁵⁾では松前から八幡に至るまで宿泊地や駕籠、伝馬の利用が詳細に記されている。またこの史料には「松前下向錢別之帳」⁽¹⁶⁾や「松前登土産配記」⁽¹⁷⁾が合綴され、旅の前後の動きについても知ることができる。

このほか嘉永二年（一八四九）「松前初下り錢別土産物扣」⁽¹⁸⁾や明治四年（一八七一）「松前屋初下り錢別土産物扣」⁽¹⁹⁾、明治九年（一八七六）「貞二郎式番店下り錢別到来記」⁽²⁰⁾など錢別や土産配りの記録もみられた。

③市田清兵衛家

初代は近江八幡新町で小間物商を営み、嫡男である二代、続く三代清兵衛が美濃・信州方面への行商をおこなった。支店を構えたのは宝永四年（一七〇七）のことで、それまで行商の拠点としていた中山道の安中（現群馬県安中市）から高崎（現群馬県高崎市）へ移り麻屋と称して木

綿太物の売買に携わった。後年、質物や瀬戸物、絹や麻、鉄鋼など幅広い商品を扱ったが、明治に入り質方が一時休業状態に陥るなどし、明治八年には店制改革をおこなっている。

旅の記録としては明治三年（一八七〇）の「道中諸入用控」⁽²¹⁾や「日誌」⁽²²⁾、「旅費仕訳帳」⁽²³⁾があげられる。「道中諸入用控」は市田屋喜助の八幡登りの費用記録で、宿泊地や駕籠、伝馬の利用区間についても記されている。同年の「日誌」は一二代清兵衛（直方）のもので、六月には高崎下り、一〇月には八幡登りについての記述もみられた。⁽²⁴⁾また「旅費仕訳帳」は八幡登りの記録で、高崎―東京間で馬車、東京―神奈川間で汽車を利用している。史料に年号は記されていなかったが、当主をはじめ奉公人の移動を記した明治二年（一八七九）「交代録」⁽²⁵⁾によると一二代清兵衛が明治一年三月に八幡登りをおこなっており、史料の日付とも一致することから、明治一年の記録とみてよいだろう。⁽²⁶⁾

④谷口兵左衛門家

宝暦年間（一七五一―一六三）仙台に支店を置いた八幡商人で、大黒屋と称して綿古着を扱い、同地では日野商人中井源左衛門と軒を並べ営業をしていた。⁽²⁷⁾弘化年間には大阪支店を設け綿古着や呉服、砂糖などを取り扱っていたが、明治期には仙台・大阪とも店を閉めている。西川伝右衛門家、市田清兵衛家にくらべ代々の当主や商家の実態についての史料が少なく、不明な点も多い。

谷口家の旅記録は明治五年（一八七二）年の仙台下りを記した「羈旅国誌」⁽²⁸⁾や明治一七年（一八八四）の「道中手控」⁽²⁹⁾のみであった。しかしながら慶応元年（一八六五）「出信小遣帳」⁽³⁰⁾の裏紙には安政五年（一八五八）の仙台下りや安政七年（一八六〇）の八幡登りの記録が使

われており、横帳を分解し再利用していることもうかがえた。

このほか銭別や土産配りの記録は文化七年（一八一〇）「寅吉初下初登諸式書付」⁽³¹⁾や文政九年（一八二六）「土産物払之覚」⁽³²⁾、明治一年「延治郎下仙餞別控」⁽³³⁾などがみられた。

第二節ではこれらの商家史料をもとに蝦夷地や仙台、高崎など各支店への行程を明らかにするとともに、日程や旅宿を比較する。

第二節 近江―松前間の行程

松前に進出した近江商人は敦賀から船で蝦夷地へ渡ったとされている。今回、柴谷文書や西川伝右衛門家文書に船旅を記した史料はみられなかったが、安政六年に九代西川伝右衛門が松前下りをした際の餞別に「海上安全御祓様」が贈られ、⁽³⁴⁾また松前から本宅へ宛てた書状には敦賀から出帆後、津軽半島の深浦港で風待ちをしたとあることから、松前へは船便を用いていたことがうかがえる。⁽³⁵⁾

西川伝右衛門家の安政六年「道中諸入用覚帳」と柴谷家の天保七年「文次郎初登小遣帳」は蝦夷地から近江を目指した旅の記録で、その行程をあらわしたのが図1である。

安政六年一〇月に九代西川伝右衛門がおこなった八幡登りでは当主にくわえ茂八、留之助、良蔵の三名が同行していた。一三日に松前を出立、津軽半島の蓬田へ船で渡り、さらに引船で内真部へ移ったあと奥州街道を南下。十一月九日からおよそ七日間江戸に滞在している。江戸での逗留先は「荳屋」とあり日本橋馬喰町の旅宿荳屋茂右衛門と推測される。⁽³⁶⁾滞在中は「見物之節五人前」や「キヤマンサカツキ十五 旦那様茂八良蔵」など、見物のほか土産を買いたい求めた様子がうかがえる。な

お五人前とあるのは当主と同行者三名に江戸見物の案内人をあわせたものであろう。^⑩ 一月一六日から再開した旅では東海道を通り、尾張の鳴海宿から美濃路経由で中山道に入った後一月二七日に帰幡している。

同史料では「七ノ戸分藤しま迄馬二疋」など伝馬の利用がたびたびみられ、奥州街道ではおよそ半分の区間で馬を使っていた。東海道では藤枝宿―島田宿、吉田宿―御油宿、鳴海宿―清州宿間で馬を利用し、油井宿―沖津宿、岡崎宿―池鯉鮒宿、中山道関ヶ原宿―醒ヶ井宿間では駕籠に乗っている。このほか盛岡から江戸までは人足を三人雇い、東海道見附宿―舞阪宿、新井宿―白須賀宿、中山道関ヶ原宿―醒ヶ井宿、鳥居本宿―近江八幡間でも人足一人を頼んでいる。また道中では奥州街道の花巻宿、日光街道の中田宿で川船を利用するほか東海道の大井川は「台越し」天龍川は「船渡し」であった。なお安倍川については「川越料渡し」とあるのみで、渡河方法は不明である。この記録では一部日付の重複がみられたものの日々一定の距離をかさねており、大川で川留めに遭うこともなく順調な旅であったことがうかがえる。

次に柴谷家の記録では天保七年九月七日に江差を出立、一六日には松前城下から津軽半島小泊まで船で渡り、日本海に沿って南下、北陸街道、善光寺街道を通り中山道を経て一〇月一七日に帰国している。史料には文次郎とあるのみで同道者は不明、さらに記述のない空白期間もあったが、前後の地名から越前の今町（現新潟県上越市直江津）を経由し、善光寺街道に入ったとみてよいだろう。

柴谷家も西川伝右衛門家と同様に伝馬を利用しているが、その区間は図1に見るように分断気味である。これは道中の川をたびたび渡っていたため、日本海沿岸だけでも「十三川渡船」、「能代川渡代」、「本庄渡

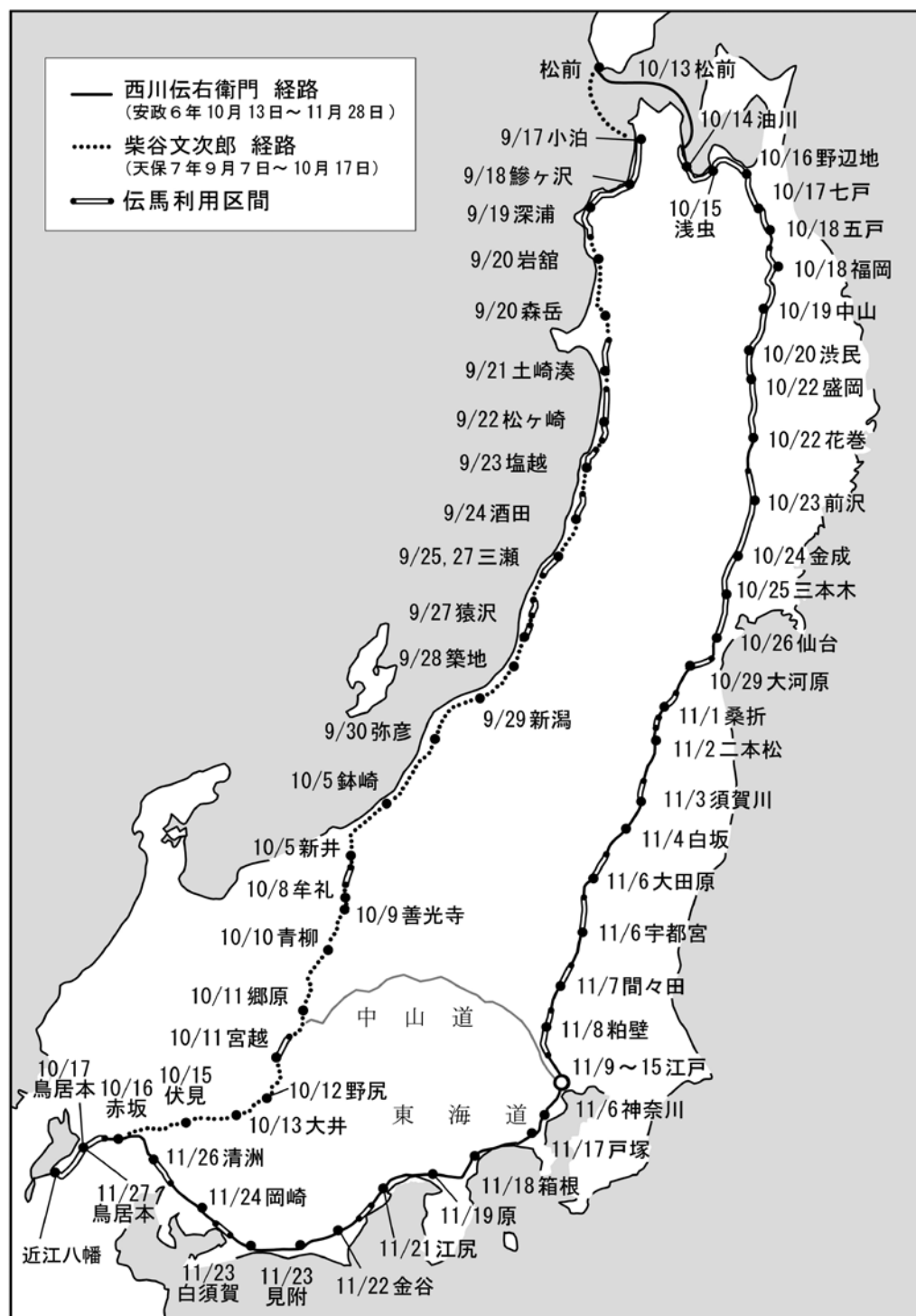
し賃」、「荇田川越せん」、「久保田川渡せん」、「吹浦渡せん」、「酒田川渡せん」、「村上川渡ちん」、「桃寄渡しせん」など多数の川越の記録がある。さらに善光寺丹波嶋で犀川、中山道太田宿で太田川を渡るほか、木曽川を川船で笠松宿まで下っている。なお津軽十三から越前今町までの河川については「北陸道中記」にも「川アリ大ワタシ」あるいは「砂川多シ水ナクテモ足入ス用心スヘシ」として注意が促されている。

西川伝右衛門家、柴谷家の旅記録には宿場名のみが記され、唯一旅宿として明らかにしたのは九代西川伝右衛門が江戸で逗留した日本橋馬喰町の荇豆屋だけであった。しかしながら柴谷文書の「東海道行程并渡海写」では松前―東京間、東京―日光間の項で「東都」として「宿馬喰丁一丁目荇豆屋茂右工門」とあり、柴谷家でも荇豆屋を利用していたことがうかがえる。

第三節 近江―高崎間の行程

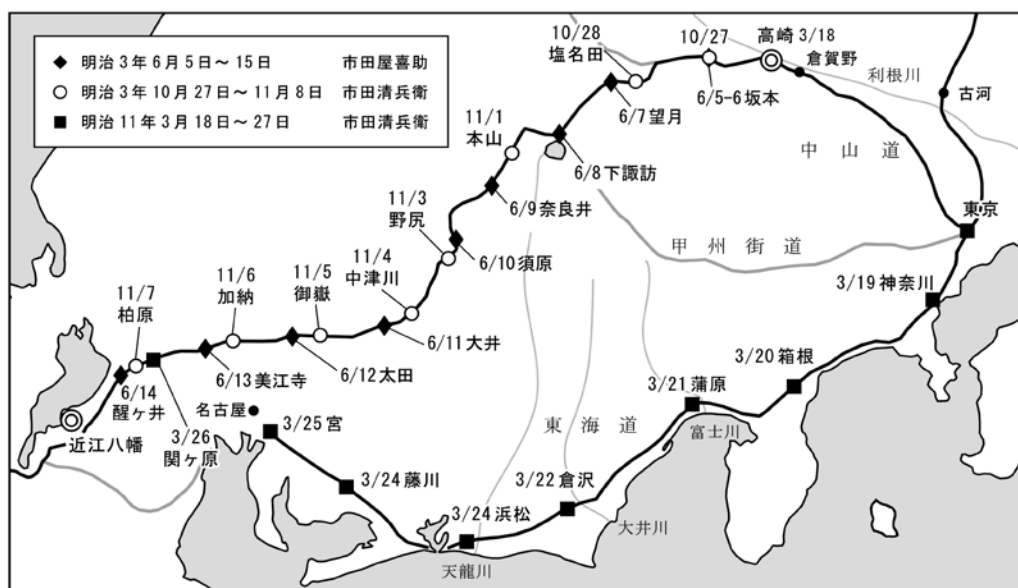
上州高崎に店を構えた市田清兵衛家には明治三年六月の市田屋喜助の八幡登り、一二代清兵衛（直方）の「日誌」に記された同年六月の高崎下りと一〇月の八幡登り、さらに一二代が明治一年におこなった八幡登りの記録がのこされている。三件の八幡登りの行程をあらわしたのが図2、各旅の行程と宿泊地をまとめたのが表1である。明治一年の「旅費仕訳帳」をのぞき近江―高崎間は中山道を通っており、その旅程はおよそ一〇日であった。記録にみられた旅宿のうち明治三年の喜助、一二代清兵衛に共通してみられたのは中山道望月宿の内田屋と加納宿杉本屋であった。また一〇月の八幡登りの益田屋は前後の宿場から福島宿の益田屋と推測される。また旅宿のいくつかは「浪花講」や「真誠講」に掲

図1 松前—近江八幡間の行程



(注) 日付は原文ママ。「柴谷文書」備忘録7 天保7年「文次郎初登小遣帳」、「西川伝右衛門家文書」1720-1 安政6年「道中諸入用覚帳」より作成。

図2 高崎—近江八幡間の行程



(注)日付は原文ママ。「市田清兵衛家文書」家109 明治3年「日誌」、商業24「道中諸入用控」、商業43「旅費仕訳帳」より作成。

二八

載されており、講に加入した旅宿に泊っていたこともうかがえた。

明治三年市田屋喜助の記録では「六月五日出立大雨ふり」と悪天候のなか高崎を發ち坂本宿で宿泊。続く六日も「大雨ふり親少々気分悪敷」として同宿に逗留している。以後は順調に中山道をたどり、諏訪宿―塩尻宿、妻籠宿―馬籠宿、大井宿―大久手宿間で伝馬を利用し、一五日に近江八幡へ帰着している。

喜助が八幡へ戻ってから五日後には二代清兵衛が高崎へ旅立っており、「日誌」には六月二〇日に八幡を出発、七月一日に高崎へ到着するまでの一日間の天気や出立・到着時刻が記録されている。この「日誌」では道中の出来事についても細かく記しており、六月二二日には次のような記述もみられた。

史料2

廿二日丁巳　御天氣六ツ時發足新加納ニ而休息頼浪宿ニ而昼飯
合渡リ休息坂本屋休息六ツ時半御嶽宿茶屋泊リ夜分ニ按摩貰日野西
村連中八人之処壺人中村前道ニ而土ニ行違候節ツき當リニ附濟方太
キニ六ツケ鋪趣也

中山道御嵩宿に宿泊した際、八人連れの日野商人のうち一人が侍にぶつかり、謝つてもなかなか許してもらえなかつたとしている。この日野商人たちは清兵衛と同じ行程をたどつていたようで、二七日には「六ツ時前二諏訪宿へ着早泊り御座候得共峠日野連中泊り二相成宿六ツヶ峠察入候」とある。記述にある峠は諏訪宿と和田宿の間にある和田峠（二五六〇メートル）のことで、宿場間が五里半弱と長いこともあり、

表1 市田清兵衛家の旅記録にみる宿泊地と旅宿

明治3年 6月5～15日			明治3年6月20日～7月1日			明治3年10月27日～11月8日			明治11年3月18日～27日		
市田屋喜助			市田清兵衛(直方)			市田清兵衛(直方)			市田清兵衛(直方)		
5日	坂本宿	山仁屋	20日		西之屋	27日	坂本宿	中村屋	18日		
6日	坂本宿	山仁屋	21日	加納屋	杉本屋	28日	塩名田宿	大阪屋	19日	神奈川宿	大米屋
7日	望月宿	内田屋	22日	御嵩宿	茶屋	29日		久兵衛	20日	湯本宿	福住
8日	下諏訪宿	柳屋	23日	大井宿	菱屋	11月1日	本山宿	長谷屋	21日	蒲原宿	谷屋
9日	奈良井宿	徳利屋	24日	三留野宿	近江屋	2日		益田屋	22日	倉沢宿	
10日	須原宿	柏屋	25日	福島宿	益田屋	3日	野尻宿	三文字屋	23日		
11日	大井宿	甚之や	26日	賛川宿		4日	中津川宿	塩屋	24日	浜松宿	大米屋
12日	太田宿	磯谷	27日	諏訪宿	柳屋	5日	御嵩宿	薬屋	24日	藤川宿	大和屋
13日	美江寺宿	千年屋	28日	望月宿	内田屋		加納宿	杉本屋	25日	宮宿	諸橋屋
14日	醒ヶ井宿	瓢箪屋	29日	軽井沢宿	井屋	7日	柏原宿	塩屋	26日	関ヶ原宿	若松屋

(注)「市田清兵衛家文書」商業24「道中諸入用控」、家109「日誌」より作成。諸講加盟の旅宿については「柴谷文書」交通1「三都講定宿判取帳」、明治初年「浪花講」、明治6年「改正浪花講」、明治10年「真誠講」、明治14年「一新講社」、明治26年「改正真誠講社」(いずれも『道中記集成 第44巻』所収)、『復刻 東講商人鑑』を参照した。

表2 谷口家の旅記録にみる宿泊地と旅宿

明治5年4月19日～5月6日			明治5年8月16日～9月14日		
19日	醒ヶ井宿	瓢箪屋	16日～18日		
20日	加納宿	杉本屋	19日	郡山宿	川崎屋
21日	御嵩宿		20日	白川宿	尾上平兵衛
22日	中津川宿		21日	大田原	川端屋
23日	須原宿	柏屋	22日～23日		
24日	奈良井宿	徳利屋	24日～9月2日	東京	木屋伝次郎
25日	下諏訪宿		3日～4日		
26日	望月宿	内田屋	9月5日	安中宿	金井
27日	坂本宿	山与	6日		
28日	倉賀野宿	須賀	7日	東餅屋	木曾屋
29日	古河宿	太田屋	8日	賛川宿	柏屋
30日	宇都宮	手塚五郎	9日	須原宿	柏屋
5月1日	大田原宿	川端	10日	中津川宿	田丸屋
2日	白川宿	尾上屋	11日	御嵩宿	茶屋
3日	郡山宿	麻屋	12日	加納宿	杉本屋
4日	福島宿	竹多屋	13日	番場宿	菓子屋
5日	宮宿	佐渡屋			諸講加盟の旅宿

(注)「谷口家文書」覚書10「羈旅国誌」より作成。諸講加盟の旅宿については明治初年「浪花講」、明治10年「真誠講」、明治14年「一新講社」(いずれも『道中記集成 第44巻』所収)、『復刻 東講商人鑑』、『諸国道中商人鑑』を参照した。

峠をはさみ和田側に東餅屋、諏訪側に西餅屋とそれぞれ茶屋が置かれていた。⁽³⁾ おそらくこの西餅屋に日野商人たちが泊っていたため、さらに手前の諏訪宿に早泊りしたものであろう。また道中では「足痛ニ附駕之乗」とする記述が数ヶ所でみられたほか、中山道追分宿―軽井沢宿間で馬を利用していた。

「日誌」に記された一〇月の八幡登りは二七日に出立、中山道を通り一月八日に帰幡している。宿泊先は「御嶽宿茶屋」や「福しま益田屋」といった旅宿にくわえ「久兵衛」とだけ記されることもあり、取引先の家へ宿泊したと推測される。軽井沢宿―追分宿、さらに長久保宿までは帰り馬を利用している。諏訪宿―塩尻宿間で駕籠に乗るほか須原宿―妻籠宿―馬籠宿―中津川宿でも駕籠に乗っているが「雪中二而寒サ甚々鋪」と山間の寒さが堪えたようである。また中山道の奈良井宿―藪原宿、中津川宿―大久手宿、太田宿では人足を雇っていた。記録には「馬二荷附ス」とあるほか、六月の高崎下りにくらべ馬の利用頻度も高いことから、帰幡時の荷物が多さもうかがえる。

明治一年の「旅費仕訳帳」は高崎から東京へ出た後東海道を通っている。記録の末尾には「主人買物別入賃」や「弥兵衛買物別口」と項目が立てられていることから、一二代清兵衛と弥兵衛の二人旅と推測される。⁽³⁹⁾ 行程は三月一八日に高崎を出発し東京までは馬車、東京―神奈川間は汽車、さらに道中ではたびたび「人力」として人力車を利用し、二七日に八幡へ到着している。記録にある馬車は高崎―東京間で運行した中山道郵便馬車会社のこと、明治一年の『懷中東京案内』によると高崎からは午前四時と午後七時の一日二便で、東京までの運賃は一人あたり一円四〇銭であった。⁽⁴⁰⁾ 市田家の記録に乗車時刻は記されていないが、

明治五年の創業当時は午前六時に高崎を出立、東京到着は午後六時とおよそ一二時間。整備されていない道を馬車で走ることもあり到着が数時間遅れることもままあったとされる。⁽⁴¹⁾ また「旅費仕訳帳」に記された東京―神奈川間の汽車賃は二人で五〇銭、東海道で利用した人力車については豊川―御油間で一二銭、名古屋―駒塚間七五銭などと明記された箇所もあったが、多くは「かん原迄人力」、「藤枝迄人力」と区間について記述がなく、個別の料金比較はし難い状況であった。なお安倍川をはじめ東海道の太田川については「ふじ川わたし」とあるほか、大井川は「川橋」、天龍川は「移しちん」と記されていた。

明治一年「旅費仕訳帳」の八幡登りの日数は九日間。先述した明治三年の中山道經由の八幡登りと日数は大きく変わらない。しかしながら、中山道を徒歩や駕籠で進むより、高い運賃を支払っても馬車や汽車を利用する方が身体的負担は軽かったであろうことは想像に難くない。

なお市田清兵衛家の「支配人員交代録 市田本店備本」⁽⁴²⁾では明治期における当主や奉公人の本宅―支店間の経路について記しており、「明治十五年二月十二日上路東海道ヲ取り神奈川ニ立寄横濱ヨリ汽船而四日市上陸」や「全十八年酉二月廿七日支店発足横濱ヨリ汽船ニテ上区國ス」など、横浜―四日市間で汽船の利用がうかがえた。また「明治二十二年六月廿九日本店へ登ル路東海道汽車七月一日本店着」と明治一年の行程にくらべ日数の短縮もみられた。しかしながら「全二十年六月廿五日本店発名古屋回中山道下向店」とあるように明治中頃でも中山道經由で高崎支店へ向かっており、こうした経路の選択、決定者については史料にも記されておらず、疑問がのこる。

第四節 近江―仙台南の行程

谷口家の明治五年「羈旅国誌」は仙台下りの記録で、当主である谷口兵左衛門に僕の駒吉、別家の青山仁兵衛、手代三名をくわえた六人の旅であった。形式は先述した一二代市田清兵衛の「日誌」に近く、日付や天候、出立・到着時間、宿泊先が箇条書きにされている。四月一九日に近江八幡を出立、中山道を通り倉賀野河岸（現群馬県高崎市）から船で利根川を下った後、日光街道へ入り奥州街道を経て五月五日に仙台支店へ到着している。

道中では駕籠や馬の利用がみられ、中山道愛知川宿―鳥居本宿、醒ヶ井宿―関ヶ原宿、赤坂宿―美江寺宿、御嵩宿、須原宿―福島宿、馬籠宿―三留野間で駕籠に乗っていた。馬は中山道加納宿、大久手宿、追分宿―軽井沢宿、松井田宿―安中宿間のほか日光街道では間々田宿―小金井宿、奥州街道氏家宿―喜連川宿、狭山宿―大田原宿、芦野宿、矢吹宿―須賀川宿、本宮宿―八丁目宿、越河宿―岩沼宿間でも利用がみられた。

また同史料には「五朔申甲 曇晴不定 日蝕七分半」として日食を見たことも記されていた。『日本・朝鮮・中国―日食月食宝典』⁽⁴³⁾によれば明治五年五月一日（新暦六月六日）に金環食が発生している。欠け始めは一三時前後、食分は〇・七四―七七であり「羈旅国誌」の記述ともほぼ一致する。なお前日の宿泊地は宇都宮で、五月一日の記録には氏家、喜連川とあることから奥州街道を北上中に遭遇したものであろう。

明治五年の「羈旅国誌」には同年八月の八幡登りについても記され、当主谷口兵左衛門と駒吉の二人旅であった。八月一六日に仙台を發ち奥州街道を南下、日光街道の間々田宿を過ぎた先、野渡河岸（現栃木県下都賀郡野木町）から乗船している。思川から利根川、さらに江戸川を下

り、八月二十四日には「今朝四ツ時前松戸金町へ上陸いたす」として水戸街道松戸宿隣接の河岸（現千葉県松戸市）に上陸している。同日東京の「木伝」に到着し九月二日まで滞在。その後は中山道を通り一四日に帰幡している。なお東京の逗留先である「木伝」は日本橋田所町の木屋・次郎である⁽⁴⁴⁾。

八幡登りでは奥州街道岩沼宿―大河原宿―越川宿、本宮宿―群山宿、矢吹宿―白川宿、芦野宿―大田原宿、佐久山宿―喜連川宿間。中山道では鴻巣宿―熊谷宿、安中宿―坂本宿、軽井沢宿―追分宿、長久保宿―和田宿―餅屋、福島宿―須原宿間で馬を利用。駕籠には中山道須原宿―馬籠宿、大井宿―大久手宿、細久手宿―御嵩宿、赤坂宿―関ヶ原宿間で乗り、日光街道小金井宿―小山宿、間々田宿―野渡河岸、中山道浦和宿―桶川宿、本庄宿―新町宿では人力車へ乗車している。谷口家の明治五年の仙台下り、八幡登りでは馬や駕籠のほか人力車を利用しており、中山道のみでみられた駕籠に対し馬は中山道、日光街道、奥州街道などで利用がみられた。また八幡登りでは中山道浦和宿―桶川宿間では人力車、鴻巣宿―熊谷宿では馬を利用し、さらに本庄―新町間で人力車に乗るなど、人力車が移動手段として定着していた様子もうかがえる。

明治五年の谷口家の仙台南往復では仙台下りはおよそ一八日、八幡登りは東京での滞在期間をふくめ約一ヶ月の旅であり、その宿泊先をまとめたのが表2である。市田家と共通してみられた旅宿は中山道醒ヶ井宿の瓢箪屋、加納宿杉本屋、御嵩宿茶屋、須原宿柏屋、奈良井宿德利屋、望月宿内田屋、坂本宿山仁屋であった。なお坂本宿については谷口家の記録では「山与」とあり市田家の表記と異なるが、谷口家の慶応元年「出信小遣帳」の裏紙の旅記録には「坂本 山仁屋与兵衛」とあることから、

同じ旅宿とみなした。

市田清兵衛家、谷口家の旅記録にみられた旅宿は「浪花講」⁽⁴⁵⁾や「東講」などの諸講に名前がみられたほか、表1の東海道湯本宿の福住九蔵、神原宿谷屋平吉、浜松宿大米屋市右衛門や表2の安中宿金井宗助、東京田所町の木屋伝次郎などは日野商人の定宿でもあった。⁽⁴⁶⁾なお安中宿の金井については『諸国道中商人鑑』⁽⁴⁷⁾に「江戸京大阪并諸国 信州松本上田善光寺 江州日野中郡八幡商人宿」として日野商人や八幡商人の旅宿であること明記している。

第五節 本宅―支店間の行程と旅宿

柴谷家をはじめ西川伝衛門家、市田清兵衛家、谷口兵左衛門家の記録から近江と遠方の支店間の旅について、その経路や移動手段、宿泊した旅宿についてみてきた。

まず蝦夷地に支店を構えた柴谷家と西川伝右衛門家はそれぞれ天保七年と安政六年の旅記録から八幡下りの行程が明らかになった。両家とも松前から船で津軽半島に渡り、柴谷家が小泊から日本海に沿って北陸街道を南下、善光寺街道から中山道に入り帰国しているのに対し、西川家は蓬田へ到着後奥州街道で江戸を目指し、同地で七日ほど滞在した後には東海道を南下、垂水宿から美濃街道へ入り中山道で帰幡している。

次に高崎に支店を構えた市田清兵衛家では明治三年の喜助、一二代清兵衛の高崎下り、八幡登りとともに中山道を通っていた。仙台に支店を持った谷口家についても明治五年の仙台下りで中山道を通り、倉賀野から川船を利用して日光街道に入った後、奥州街道で仙台へ向かっている。同年の八幡登りについても奥州街道、日光街道を通り、野渡河岸から船で

松戸へ下り、江戸から中山道経由で帰幡している。

なお柴谷文書には「北陸道中記」や「東海道行程并渡海写」のように諸街道について記した史料がのこるほか、市田清兵衛家の当主や奉公人の移動を記録した明治一二年の「交代録」や「支配人員交代録 市田本店備本」では横浜―四日市間で汽船を利用するなど、さまざまな経路で近江と支店間を行き来したことが明らかになった。

道中では移動手段として駕籠や馬がたびたび利用され、安政六年の西川伝右衛門の八幡下りでは奥州街道の約半分の区間で馬を使ったほか、市田清兵衛、谷口兵左衛門の旅記録でも中山道、日光街道、奥州街道の諸街道で馬の利用がみられた。また谷口家の明治五年の仙台下りでは中山道倉賀野宿から日光街道への移動に船で利根川を下り、同年の八幡登りでも日光街道野渡河岸―水戸街道松戸河岸間で船を利用していた。明治に入ってから市田家の「旅費仕訳帳」にみられたように馬車や汽車、人力車なども利用していた。

旅宿については安政六年に九代西川伝右衛門がおこなった八幡登りで、日本橋馬喰町の荳屋に滞在したことが明らかになった。同宿の名前は柴谷文書の「東海道行程并渡海写」にもみられたことから、西川伝右衛門家、柴谷家ともに利用した旅宿であると推測される。また市田清兵衛や谷口兵左衛門の旅記録には宿泊先や旅宿についても記されており、近世に興った旅宿同盟「浪花講」や「東講」など諸講に加入した旅宿のほか、日野商人の定宿にも泊まっていたことが明らかとなった。柴谷文書には「三都講定宿判取帳」ものこされており、柴谷家では「三都講」に加入し、鑑札を持って旅をしたのであろう。また谷口家が江戸滞

在時に利用した日本橋田所町の木屋は先述の荳屋とともに同地区にお

いて坪数の多い旅宿とされ、柴谷家、西川伝右衛門家、谷口家が江戸で中々大規模の旅宿に滞在していたことがうかがえる。

第二章 旅土産について

旅土産は近世以降、庶民の間で旅が一般化する過程において習慣化したもので、その土地に赴いたことを証明するとともに、草鞋銭や饞別の返礼として存在を確立していった。土産品は長旅でも変質せず、かさ張らないものが基本とされ、工芸品や菓などが好まれたとされる⁽⁴⁸⁾。

西川伝右衛門家や谷口兵左衛門家には、旅記録のほか土産配りにについても史料がのこされ、たとえば西川家の嘉永二年「松前初下り饞別土産物扣」では配り先や品物が次のように記されている⁽⁴⁹⁾。

〈史料3〉

西川喜六殿分

一 白結城紬 一反

一 きせる 一本

一 た葉古入 一ツ

メ 三品 金壺両位

第二章ではこうした記録をもとに、近江商人が遠方の支店からどのような品を土産として持ち帰ったかを明らかにする。なお本稿では土産品の特長が目的であり、個別数量の多少にかかわらず、品物を一点と数えている。

第一節 西川伝右衛門家の土産

西川伝右衛門家には安政六年「松前登土産配記」や嘉永二年「松前下り饞別土産物扣」、明治四年「松前屋初下り饞別土産物扣」、明治九年「貞二郎式番店下り饞別到来記」などがあり、これら四点の記録から点数の多い土産品をまとめたのが表3である。

嘉永二年「松前下り饞別土産物扣」はのちに九代伝右衛門となる西川栄蔵の初下り記録で、嘉永二年八月一七日に立出、同年一〇月二三日に帰幡している⁽⁵⁰⁾。饞別は西川家の親類や医師をふくめ二〇人、立出後には七人から留守見舞も届けられている。土産の配り先は親類や檀那寺、町中の組頭など六七人で、このうち二三名が饞別や留守見舞の贈り主であった。

土産品は三九種一四八点で、一人あたり一〇七点の土産が配られていた。最も多かった土産はたばこ入れ三〇点、次いで棒鱈一七点、帆立貝一二点、江戸の役者を描いた江戸絵九点であった。棒鱈は五〇〇・四〇〇・三〇〇匁と目方も記され、別家や出入方を中心に木綿とともに配られていた。また饞別の贈り主である親類には、たばこ入れにくわえ結城紬や博多帯などを土産とした。このほかの土産には浅草海苔や蝦夷細工物、テンギなどがあつた。

続いて安政六年、九代伝右衛門の松前往復記録に合綴された「松前登土産配記」では土産の配り先は四七人、品物は二五種七四点であった。総数の変化は一人あたりの土産数の減少によるもので、嘉永二年は一人あたり最大七点であるのに対し安政六年では最多でも四点で、一人一点が大半であった。なお同史料に記された松前下りの饞別や留守見舞の贈り主は四九人で、二三人に土産が配られている。

土産物の多くは棒鱈で四七人中三〇人に配られたほか、塩引きや帆立貝といった海産物、テンキや手拭い掛けなどの工芸品に唐太玉^⑤、蝦夷錦^⑤などアイヌの人々が樺太経由でおこなった山丹交易の品もみられた。嘉永二年の記録と同様、親族を中心に棒鱈とあわせて小紋更紗や結城紬なども配られている。また別家中に配られた「キヤマン盃」や「水玉面爛德利」は先述の安政六年「道中諸々入用覚帳」にその購入記録のこされ、江戸滞在中に求めた土産であることも明らかになった。

明治四年「松前屋初下り銭別土産物扣」と明治九年「貞二郎貳番店下り銭別到来記」は一〇代西川貞二郎への銭別と土産配りの記録である。前者は明治四年五月六日に松前へ下り、明治六年九月二日に帰国、後者は松前下り、八幡登りともに日付は明記されていない。

初下りの土産は五九人に配られ、品種は二九種一一四点。銭別は二二人から贈られ、うち一三人に土産を配っている。配り先のうち四六人は土産が一〇二点で、一人あたりの最多は五点であった。棒鱈は五九人中三七人に配られ、棒鱈一点のみであったのは一六人、それ以外は蝦夷細工や風呂敷、たばこ入れなど複数の品をあわせて配られていた。この記録では筆立てや手拭い掛け、茶碗や糸巻き、さじなど多彩な蝦夷細工が特徴としてあげられる。また昆布料や真綿料として金子を配るほか、美濃紙や上部を赤く染めた天紅など紙類も増加していた。なお嘉永二年、安政六年の記録にみられた帆立貝や塩引きはみられず、海産物は棒鱈と鯡の身欠のみであった。

明治九年の二番下りでは五七人に三六種一二八点の土産を配っていた。銭別や留守見舞の贈り主は二二名、うち土産を配ったのは一五名であった。土産物は棒鱈をはじめ状袋やたばこ入れ、手拭いや巻紙などが

表3 西川伝右衛門家文書にみる松前土産

年度	嘉永2年10月		安政6年11月		明治6年9月		明治9年	
人数	67人		47人		59人		57人	
点数	148点		74点		114点		128点	
品名	たばこ入れ	30	棒鱈	30	棒鱈	37	棒鱈	19
	棒鱈	17	塩引き	6	金子	24	状袋	14
	帆立貝	12	金子	5	蝦夷細工	14	海苔	14
	江戸絵	9	江戸絵	3	わらび	6	巻紙	14
	風呂敷	8	唐太玉	3	美濃紙	5	手拭い	12
	真岡木綿	7	帆立貝	2	天紅半切	5	たばこ入れ	12
	白やしま紬	6	テンキ	2	身欠	4	江戸絵	8
	金子	5	唐木筆	2	たばこ入れ	4	風呂敷	7
	手拭い	5	唐紙	2	手拭い	4	棒いお	3
	きせる	4	爛德利	2	風呂敷	3	中形	3

(注)「西川伝右衛門家文書」1715 嘉永二年「松前初下り銭別土産物扣」、1720-4 安政六年「松前登土産配記」、1761 明治四年「松前屋初下り銭別土産物扣」、1762 明治九年「貞二郎貳番店下り銭別到来記」より作成。

各一〇点以上みられ、全体に占める棒鱈の割合は減少している。また海苔は「包海苔」や「瓶詰海苔」、「小瓶海苔」などと書き分けられていた。瓶詰海苔がガラス瓶入りの海苔を指すのか、あるいは瓶詰の佃煮であったかは不明だが、嘉永二年の土産記録では「浅草苔海^⑤」としていたことから、瓶詰と記す点に他の海苔と区別する意識がうかがえる。

第二節 谷口家の旅土産

谷口家の土産記録は文化七年の「寅吉初下初登諸式書付」、文政九年「土産物払之覚」、明治十一年「延治郎下仙餞別控」の三点で、それぞれ点数の多い土産を表4にまとめている。

文化七年「寅吉初下初登諸式書付」は八月の仙台初下りの餞別と、文化十一年三月の土産配りの記録である。^(注)この史料では個人に土産を配るほか、具体的な件数は不明だが「町内不残」として茶碗二個、青のりなどが配られている。配り先は四一、土産品は一八種九五点であった。餞別は一七人から贈られ、うち九人に土産を配っている。品物は江戸絵のほか浅草海苔、たばこ入れ、茶碗などが各一〇点ほどみられ、江戸絵や海苔については西川伝右衛門家同様、江戸での滞在時に買い求めたと推測される。

次に文政九年の「土産物払之覚」は表書に「文政九戊二月土産物控」とあるのみで、旅行者や旅先は記されていない。土産は一九人に対し一四種三三点が配られており、品物は真綿や海苔、きんこ、梳櫛などがみられた。このうちきんこは陸奥国金華山近海の海鼠を「金海鼠」と呼ぶことから、旅先は仙台方面とみてよいだろう。

明治十一年の「延治郎下仙餞別控」は同年一〇月に仙台支店へ下った谷口延治郎への餞別と、翌年四月に帰国した際の土産配りの記録である。延治郎は明治十一年二月に二四歳で谷口家の養子となった人物で、生家は蒲生郡本郷村、永福孫兵衛の二男であった。^(注)一〇月の初下りに際しては養子の仲人のほか親類や実父など一二名から餞別を受け、帰国時には餞別の贈り主すべてと、養子入りの際の同伴者をくわえた二〇名に土産を配っている。土産物は七種三三点で主な品物は真綿や風呂敷などで

あった。

西川伝右衛門家や谷口兵左衛門家の史料では、餞別の控へと土産配りの記録を一つの帳面にまとめていることが多く、餞別と土産を関連づける意識がうかがえた。しかしながら明治十一年の「延治郎下仙餞別控」をのぞき餞別の贈り手に土産を配るのは半数以下であり、かならずしも餞別の返礼として土産を認識していたわけではないようだ。

西川伝右衛門家では棒鱈がすべての記録にみられたほか、蝦夷細工も土産にしており、文化文政期に蝦夷趣味として好まれた品々が明治に

表4 谷口家文書にみる旅土産

年度	文化12年3月		文政9年2月		明治12年4月	
人数	41人		19人		20人	
点数	95点		33点		23点	
品名	江戸絵	17	真綿	8	真綿	8
	浅草海苔	12	海苔	6	風呂敷	7
	たばこ入れ	12	きんこ	4	手拭い	4
	茶碗	12	梳櫛	3	海苔	1
	筆	8	はし	3	小倉縞	1
	風呂敷	7	紙たばこ入れ	1	麻裏	1
	きせる	4	きせる	1	埋木盆	1
	杉原紙	4	江戸本	1		
	天塩	4	釜しき	1		

(注)「谷口家文書」祝儀13 文化7年「寅吉初下初登諸式書付」、祝儀95 文政9年「土産物払之覚」、雇用2 明治11年「延治郎下仙餞別控」より作成。

入っても人気であったことがうかがえる。また明治期には昆布料や足袋料といった金銭、状袋や巻紙などの増加傾向にあった。また安政六年の「道中諸入用覚帳」により、江戸での滞在時にガラスの盃などを買い求めたことも明らかとなった。

また谷口家の土産配りの記録からは、仙台近辺の土産として文政九年の「土産物払之覚」に記されたきんこ（金海鼠）のみが確認できた。このほか江戸絵や江戸本、浅草海苔などは江戸滞滞時に購入したものであろうが、それ以外の品物については産地を特定できず、共通した品も皆無であった。

棒鱈のように支店を置いた地域の産物を土産とした西川伝右衛門家に對し、谷口家は数点の江戸土産を除き産地を特定できる土産はみられなかった。土産品に多くみられた風呂敷や真綿、江戸絵や海苔などはいずれも軽く薄いもので、長旅での持ち運びに重点を置いた土産品であったと考えられる。なお西川伝右衛門家でも風呂敷など軽量の品物はみられ、明治期には紙類とあわせてその割合も増加傾向にあったが、主となる土産は棒鱈であり、西川家の土産の定番であったとみてよいだろう。

むすびにかえて

本稿では近江商人の商家文書から、近江と支店間の旅について、行程や移動手段などその一端を明らかにした。

蝦夷地に店を構えた柴谷家、西川伝右衛門家の旅記録からは、蝦夷地―近江間の経路をたどることができた。松前から船で津軽半島に渡った後、柴谷文次郎が日本海沿岸の街道を通るのに対し、九代西川伝右衛門は奥州街道から江戸を経由し東海道で帰幡しており、ふたつの経路が明

らかになった。また九代西川伝右衛門が江戸で逗留した日本橋の荳屋は柴谷文書「東海道行程并渡海写」にもその名前が見られ、西川家、柴谷家ともに利用した旅宿といえよう。

一方、高崎に支店のあった市田清兵衛家の記録では高崎下り、八幡登りともに中山道を通っており、仙台支店を持った谷口兵左衛門家についても中山道を利用していた。市田清兵衛家文書の「交代録」や柴谷文書の「北陸道中記」からは、各家がさまざまな経路で近江と支店間を旅していたことが明らかになったが、経路選択の決定者などについては史料からうかがうことはできなかった。

移動手段としては馬や駕籠の利用がたびたびみられたほか、谷口家では中山道倉賀野宿から日光街道へ入るために利根川を船で下るなど、川船の利用も認められた。また市田家の明治期の史料には「人力」として人力車の利用がみられたほか、明治一年に二代市田清兵衛がおこなった八幡登りでは、馬車や汽車など新たに興った乗り物を移動手段としたことも明らかとなった。

さらに旅から帰った商人たちが親類や近隣に配った旅土産では、西川伝右衛門家が蝦夷地の産物である棒鱈を中心としたのに対し、谷口家では支店を置いた仙台近辺の産物は少なく、巻紙や風呂敷など軽く持ち運びのしやすいものが多くみられ各家ごとの特徴もあらわれた。こうした土産は饒別の贈り主に配るほか、別家や檀那寺、時には町内中に配ることもあったようである。

近江商人の旅を知るにあたり、本稿では近江―支店間の経路や宿場などに焦点を置いた。しかしながら実態をより明らかにするためには宿泊費や道中での人馬駄賃、さらに一回の旅にかかった費用の総額など金銭

面での分析が必要であろう。

注

- (1) 江頭恒治『近江商人中井家の研究』雄山閣、一九六五年
- (2) 上村雅洋『近江商人の経営史』清文堂、二〇〇〇年
- (3) 本稿で用いた「西川伝右衛門家文書」、「市田清兵衛家文書」、「谷口家文書」、「柴谷文書」は滋賀大学附属史料館の所蔵である。
- (4) 両浜組については『近江商人の経営史』（前掲）に呼称の経緯や御用金の割合などが述べられている。
- (5) 「柴田文書」備忘録七
- (6) 同右、備忘録三。表紙には「明治十年北陸道中記丑三月吉日写之」とある。
- (7) 同右、備忘録四。表紙には「明治十一年東海道行程并渡海寅四月吉日写之」とある。
- (8) 北陸街道は機内から越後まで、あるいはさらに北上して羽州鼠ヶ関（現山形県）までの街道を指し、鼠ヶ関以北は羽州浜街道などと呼ばれるが、本稿では史料表記に基づき便宜上北陸街道と呼ぶ。
- (9) この二点については底本とした史料は文書中にみられず、宿場名や距離などを近世以降流通した「道中記」を参考にしたものか、柴谷家当主が旅中で書き記したものであるかは不明である。
- (10) 「柴田文書」交通一
- (11) 同右、交通二
- (12) 今井金吾監修『道中記集成第四四巻』大空社、一九九七年
- (13) 今井金吾監修『道中記集成第四二巻』大空社、一九九七年
- (14) 「西川伝右衛門家文書」一七二〇—三
- (15) 同右、一七二〇—一
- (16) 同右、一七二〇—二
- (17) 同右、一七二〇—四
- (18) 同右、一七一五
- (19) 同右、一七六一

- (20) 同右、一七六一
- (21) 「市田清兵衛家文書」商業二四
- (22) 同右、家一〇九
- (23) 同右、商業四三
- (24) 市田清兵衛家文書には歴代の当主が記した「日記」があり、九代清兵衛直微から一三代直豪、一五代直基まで史料の多少はあるが、文化元年（一八〇四）から明治三九年（一九〇六）までおよそ百年間の記録がのこされている。本稿で使用した明治三年の日記は「市田直方」とのみ記されているが、『近江商人の経営史』「表二八 市田家の歴代当主」（二〇六頁）により一二代清兵衛であることが明らかになった。
- (25) 「市田清兵衛家文書」商業四
- (26) 前掲『近江商人の経営史』では「交代録」や雇人請証書を用いて市田家の奉公人について初登りの年度や若衆昇格までの期間、解雇年月日などを明らかにしている。
- (27) 前掲『近江商人の経営史』二八八頁
- (28) 「谷口家文書」覚書一〇
- (29) 同右、覚書一一。史料には「明治一七年九月廿九日午前九時三十分頃店出立兵左衛門駅二向通之奥岩谷堂二出掛方取集ト発届致候事」とあり、掛け金の記録とみられるが本稿では使用していない。
- (30) 同右、覚書七
- (31) 同右、祝儀二三
- (32) 同右、祝儀九五
- (33) 同右、雇用二
- (34) 「西川伝右衛門家文書」一七二〇—二「松前下向銭別之帳」
- (35) 同右、一三六四—二六、六月二〇日（近世）「書状」（栄蔵様無難当着、丑年勘定帳当年仕入目録為替金手形六通受取、箱館江渡来之アメリカ舟出帆の件、御公役衆中北蝦夷地見分済シヤリ越風聞の件、兵庫にて鯉商ひの件）
- (36) 荳屋茂右衛門は『東京百事便 第三編』（復刻版、フジミ書房、一九九九年）の旅人宿、日本橋区の項に「荳屋（馬喰町一丁目十二番地堀内茂右衛門）（客

室九十坪餘」諸国商人の品物仕入の爲め出京する者の投宿多し」とある。同書の日本橋区には一三四軒の旅宿が記されているが、一〇〇五〇坪の旅宿が大半を占め、苳豆屋のように九〇坪以上の宿はわずか六軒であつた。

また同宿では江戸見物のチラシ「從馬喰町江都見物名所方角略絵図」（江戸東京博物館総合案内に掲載）を配るほか、「新板諸国道中旅鏡」（今井金吾監修『道中記集成 第二九卷』大空社、一九九七年）では、「諸国売払所」として江戸旅宿八軒のなかに含まれている。また苳豆屋は天保元年に大阪日本橋・河内屋庄右衛門を講元として興つた「三都講」の世話人でもあつた（前掲『道中記集成 第四三卷』）。

- (37) 竹内誠「観光都市・江戸の一考察」（立正大学人文科学研究所年報 四三）立正大学人文科学研究所、二〇〇六年）では、奥州から伊勢参宮をする庶民の旅でも江戸で滞在することがあり、その見物にあたつては旅宿が案内人を紹介したとされる。

- (38) 服部英雄『峠の歴史学―古道をたずねて―』朝日新聞社、二〇〇七年
- (39) 明治二年「交代録」、明治二年「支店人員交代録」によると弥兵衛（田中傳兵衛）は文久三年から明治八年まで支配役を続けていたが、明治二年三月に「本人出勤中不都合在之當三月限出勤差止メ事」となっている。
- (40) 福田栄造『懷中東京案内』同盟社、一八七八年
- (41) 藤原宏『明治の郵便・馬車鉄道』雄松堂出版、一九八七年
- (42) 「市田清兵衛家文書」商業六
- (43) 渡邊俊夫『日本・朝鮮・中国―日食月食宝典』雄山閣出版、一九九四年
- (44) 前掲『東京百事便 第三編』には「木屋（田所町十六番地西尾傳次郎）（客室六十九坪）諸国の旅人多し」とある。
- (45) 今井金吾監修『道中記集成 第四四卷』大空社、一九九七年
- (46) 日野滋賀県日野町教育会編『近江日野町志 卷中』（復刻版、臨川書店、一九八六年）の「明和七年改日野商人仲間中仙道東海道宿々定宿合印扣帳」（二九六頁）、「日野商人定宿定宿（明治八年乙亥改正合符）仲間大当番」（四〇七頁）を参照。

なお二二代市田清兵衛が明治三年の高崎下りの折、御嵩宿で起こった日野商

人と侍とのトラブルであるが、日野商人と同宿したという記述はみられず、「日野商人定宿」でも御嵩宿は「西ノ銭屋」であるため茶屋で出来事を伝え聞いたものと推測される。

- (47) 今井金吾監修『道中記集成 第三八卷』大空社、一九九七年
- (48) 神崎宣武『おみやげ―贈答と旅の日本文化―』青弓社、一九九七年
- (49) 「西川伝右衛門家文書」一七一五
- (50) 同右、一七一六、嘉永二年「元服到来物」。西川栄蔵は天保四年（一八三三）一二月生まれ。嘉永二年の初下り時は一六歳で、同年二月に元服したばかりであつた。
- (51) テンキはハマニンニクを指すほか、その草を使つて編んだ籠などの容器をさす。
- 荒山知恵「ハマニンニク製の容器「テンキ」―テーマ展「アイヌの工芸テンキ」および関連事業からの報告―」（いしかり砂丘の風資料館編『いしかり砂丘の風資料館紀要』第三卷、二〇一三年）
- (52) 大塚和義「〈資料と情報〉和人を魅了した蝦夷細工―手拭い掛けを例にして―」（国立民族学博物館、『民博通信』、八四号、一九九九年）によると、天明から文化・文政の時期には一種の蝦夷趣味が盛んで、アイヌの彫刻が施された手拭い掛けも「蝦夷土産」として好まれた。持ち運びに便利のように組み立て式で、箱に収納できるように設計されたとされる。
- (53) 唐太玉は青いガラス玉のことで青玉、虫の巣とも呼ばれた。アイヌの首飾り（タマサイ）に用いられたほか、蝦夷切の紙入れに青玉の風鎮を使ったものは江戸などでも評判だったとされる。
- 佐々木史郎「アムール川下流域諸民族の社会・文化における清朝支配の影響について」（『国立民族学博物館研究報告 一四（三）』、一九九〇年）。
- (54) 蝦夷錦は中国製の絹のことで、山丹交易により大陸から樺太を経て蝦夷地へもたらされ、さらに松前から北前船で江戸や大坂に運ばれた織物である。なお滋賀県日野では祭りで用いる曳山に蝦夷錦を飾るものがある。
- 日野町史編さん委員会編『近江日野の歴史 第五卷 文化財編』滋賀県日野町、二〇〇七年

(55) 海苔の保存に初めてガラス瓶を用いたのは弘化年間、品川近くの大森の海苔商とされ、明治初年には江戸の一部の海苔商の間も用いられたとされる。

宮下章『ものと人間の文化史一一 海苔』法政大学出版局、二〇〇三年

(56) 旅をした寅吉の詳細は不明であるが、同史料には「四月八日九日元服振舞」として元服の記録があり、「町内御客様」として御年寄などを招いて盛大におこなっており、谷口家の後継者であった可能性が高い。

(57) 「谷口家文書」家六、明治一年「延治良養子引取候節諸用記」

「付記」本稿は「NPO法人たねや近江文庫」との平成二八年度共同研究「近江商人の文書にみる旅の研究」の研究成果の一部である。